

文化財の価値（案）（保存活用計画第 1 章記載）

1. 国登録有形文化財意見具申所見「赤星鉄馬邸の価値」の記述（抜粋）

赤星鉄馬邸はアントニン・レーモンドが戦前に設計した RC 打ち放しの大規模住宅で、現存する唯一のものである。自邸で試行していた RC 打ち放しの可能性を追求する近代国際様式（インターナショナルスタイル）から日本建築に影響を受け自然環境との融合をめざした初期モダニズムの代表的な住宅である。設計において重要であった前庭も現存しており、住宅建築では失われることが多いノエミ夫人の造作が良好に遺存している点も特筆される。このため、登録有形文化財基準の「造形の規範となっているもの」に該当するものと考えられる。

2. 文化財登録原簿に登録した際の特徴・評価

成蹊大学の南に広大な敷地を構えた実業家邸宅で、建築家レーモンド設計。中央で屈曲した東西に長い中廊下型平面で、前庭側外観は水平連続窓とする。キャノピーを差し出した玄関にはスリットを入れた曲面壁の階段室を構え、コンクリート造形の可能性を追求。

3. 旧赤星鉄馬邸の価値

○レーモンドが戦前に設計した建築が残されている

- ・レーモンドは、戦前から戦後にかけて日本の近代モダニズム建築の旗手として数多くの著名な建築作品を残し、日本の建築界に多大な影響を与えた。
- ・レーモンドは組織的な設計事務所を設立し、前川國男など優れた所員を輩出した。その中でも、戦前の事務所内でナンバーワンの弟子といわれた杉山雅則（元武蔵野市民）が設計を担当したのが本邸である。
- ・現存する唯一のコンクリート打ち放しの大規模住宅である。
- ・レーモンド作品における初期モダニズム建築の中でも、モダニズム建築と日本の建築様式との融合を試みている時期の代表的な建築である。
- ・曲面の外壁を打放しコンクリートで仕上げるのは当時世界でも先端であった。
- ・レーモンドの日本建築に関する考え方を反映した、施主の日本式・西洋式双方の生活様式に合わせた設計（二重生活）は当時では希有である。平面プラン、中庭と南側の庭、家具にその特徴が表れている。
- ・アントニンおよびノエミ・レーモンドは、共同して、建物のみならず家具、テキスタイル、照明器具などまで統一性のあるデザインをしていた（トータルデザイン）。特に本邸では、ノエミ・レーモンドが担当した造作家具は現在も状態よく残っている。

○前庭が残されており、レーモンド建築の特徴である内外空間の連続性を体感できる

- ・戦火を免れながら前庭の大部分は残されており、公園空白地域にある貴重なオープンスペースである。
- ・前庭では竣工当時ゴルフ練習に使用していたバンカーの凹凸や、接收時代のフランス風庭園への改変、修道女会による植樹の痕跡が残されており、各時代の暮らしの歴史を物語っている。
- ・前庭と建物の連続性を、インナーバルコニーと特徴的なサッシによって実現した。

○四村が合併してできた武蔵野町の発展初期の景観が残されている

- ・明治末期頃から短冊状敷地が集約され郊外型別荘地として発展した吉祥寺地域における敷地規模（スケール）が残されている。
- ・成蹊学園の創設に寄与し成蹊学園初代理事長である岩崎小弥太と鉄馬は深い親交があり、鉄馬は子供たちを成蹊学園に通わせるため当地に転居してきた。戦前吉祥寺地域が、学園都市や別荘地として発展してきた歴史を象徴している。

○旧赤星邸を介して市民等のつながりが広がる素地が大きい

- ・旧赤星邸では、修道女会がクリスマスパーティーを行ったり、野口雨情から吉祥寺を紹介され成蹊学園付近に移り住んだ金子光晴が前庭によく訪れたり、地域住民や文化人に長年親しまれてきた。
- ・多くの個性的な飲食店を特色とする吉祥寺駅徒歩圏内に立地している。
- ・建物と庭園を一体的に活用した幅広い活動が可能である。
- ・旧濱家住宅西洋館（吉祥寺北町）や、レーモンド設計の東京女子大学礼拝堂（杉並区善福寺）、国際基督教大学図書館本館・礼拝堂・教員住宅（三鷹市）などが近隣地域にある。周辺の近代建築をネットワーク化することで武蔵野地域の歴史を効果的に伝えていくことが可能である。